

世界紀行文学全集

2

フランスⅡ

世界紀行文学全集

フランスⅡ

2

志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第二卷

フランスⅡ

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二一九十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蒔人

総発売元

株式会社はるぶ

東京都新宿区新宿二一九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

土岐善麿
柳亮
本間久雄
川島理一郎
浜田青陵
辻潤
正宗白鳥
岡本かの子
武林無想庵
福原麟太郎
岩田豊雄
林芙美子
嘉治瑠璃子
小堀杏奴
市河三喜子
新村出
和田三造
滝沢敬一

第一夜……三	落葉を踏む……五	葡萄酒の記憶……六
ふらんす賭博考……		八
オスカア・ワイルドの墓……		二
モンマルトル……七	巴里の花火祭……三〇	コルシカの思い出……二
西仏とどこどころ……		四
巴里の十日間……言	無想庵との邂逅……	三
巴里到着後最初の幻滅……完	饑餓と酒場……	四
巴里のキャフェ……兎	巴里の唄うたい……吾	街頭……
飢渴信……		五
パリ……三	フランスの思い出……	三
モンマルトルの散歩……六	巴里のミュージック・ホール……	九
下駄で歩いた巴里……全	巴里を歩く……八	巴里案内……六
蘭西の田舎……		五
祖父の写真……		一〇
巴里……		一〇
花の都パリ……		一〇
仏蘭西の春……		一〇
昔馴染のパリを探る……一三	パリ騒動を見る……一三	パリの女は……一五
何故美しい……一三	郊外をたずねて……	一五
里昂物語……一五	明治山麓行……	一六

高浜 虚子	マルセーユ上陸……………一三	巴里滞在……………一四	巴里俳句会……………一五
島崎 藤村	ムードン 吟行……………一六	シエルブウル港より巴里へ……………一四	仏蘭西雑記の一……………一三
	西雑記の二……………一五	仏蘭西雑記の三……………一四	仏蘭西雑記の四……………一五
	一五 一つの譬話……………一七	仏蘭西雑記の五……………一七	「東方の門」……………一五
横光 利一	歐洲紀行……………一六	ブルターニュとノルマンディーへの旅……………一六	
斎藤 清衛	ブルターニュとノルマンディーへの旅……………一六	マチス・ルオー・ドラン・ピカソ訪問記……………一七	
武者小路実篤	アラン訪問記……………一八	モンテーニュの城……………一六	スタンダール遺跡めぐり……………一九
桑原 武夫	ブルターニュ紀行……………一九	巴里の本屋など……………一四	巴里の公園……………一九
今 日出海	巴里だより……………一九		
岡 鹿之助	ボナアルの回想……………二〇		
野上 豊一郎	パリの地下牢……………二七	ヴェルダン……………二五	
野上 彌生子	フランス……………二七		
中村 光夫	戦争まで……………二七		
渡辺 一夫	パリの思い出……………二七		
高田 博厚	一九五〇年この頃……………二七		
阿部 知二	人間の都……………二八	伝統……………二八	

梅原竜三郎	遊欧雜記……………	四二	パリの自動車……………	四二五	パリの美術館……………	四二六
田中峰子	言葉、食べもの、美術館、パリ……………					四〇五
佐藤嘉津	セーヌ河畔みぎひだり……………					四〇三
村松梢風	女王の杜……………					三九〇
宇野千代	私の巴里通信……………					三八二
木下順二	パリの無感動……………					三七五
村松梢風	カンヌ映画祭……………	三六七	パリの芸人……………	三七一	フランス縦走記……………	三七三
中川一政	と立話……………	三六三	モンマルトルの空の月……………	三六〇	フランス美術……………	三六二
杉捷夫	オペラ・コミックにゆく……………	三五八	ル・アーブル港……………	三五七	褐色の絵……………	三五八
小泉信三	小雨のボルドー……………	三五五	フランスメ術……………	三五三	パンの棒……………	三五三
大岡昇平	フランス旅行……………					三四四
長与善郎	フランシス……………					三三八
志賀直哉	南仏紀行……………					三三八
堂本印象	芸術家フランス人……………					三六六
裕伊之助	リザの微笑……………	三三三	南仏の旅……………			三六六
芹沢光治良	パリ画信……………	三三二	パリの歌姫……………	三三二	セーヌ河……………	三三二
	マチスに会う……………					三三九
	ルーブルにて……………					三三八
	パリ祭……………	三〇三	コルトーに会う……………	三〇四	ルイ・ジュベの死……………	三〇六
	ピカソとの一日……………	三九六	冬の南仏……………			三〇〇

川端 康成	芝居……………	四七
田村 泰次郎	パリのマネキン……………	四八
村川 堅太郎	非情の都……………	四二
伊藤 整	裏側から見たパリ……………	四三
土岐 善麿	パリの志賀・梅原両先生……………	四六
岩田 豊雄	アヴィニョンとアルル行き……………	四九
	ペン・クラブの例会……………	四二
	一人のモナコ……………	四四
	ルウレットを廻りて……………	四三

堂本 印象	画と文
南仏の葡萄酒七	凱旋門 三
ザール 三	パリのビストロ 四
ボア 二〇	モンマルトル 六
ティール 一	コンコルド広場 七
アヴィニョン 三	オペラ通り 一
果物店 三	パリの新聞 二
	パリの花売娘 三
	ピガール 二
	サン・ミッシェル 三
	モンマルトルの坂道 四

執筆者・出典一覧……………	四三
地 図 フランス、パリ、パリ付近……………	卷末（折込）

フ
ラ
ン
ス
Ⅱ

第一夜

土岐 善磨

それはバリの第一夜。

欧州航路の四十余日は、ただ悠々と船に乗っていて、毎日デッキゴルフをしていれば何の心配もない。マルセーユ、ニース、かくてガール・ド・リヨンへ降りた僕を抱えるように出迎えてくれたN君が夕刻またホテルへ来てくれて、

「これから早速案内しよう。恰度今夜はヴェルダ・カートの例会だから、まずエスペラントの効果を發揮するために、一緒に出席しようではないか。」

「何処へでも行くよ。」

「花の都」へ着いた気軽さに一ト風呂、汽車の埃と垢とを落して、新しいワイシャツの肌ざわりも快く、乗せられた地下鉄道の方角は全く判らなかつたが、何でもモンマルトルの一角、小さなカフェの一角に、初対面のサミデアーノやサミデアーノにかこまれて、各自の「国語」を超越した国際人らしいはしやぎ

気分にて二時間ばかりを過した後、N君と二人だけそこをお先きに失敬したが、もし疲労していなければ、序に、近郊のちよいと痛快なところを覗かせてあげよう、とN君がいうまゝ、あまり明るくない小路を辿って、「これもマア旅の一興と思いたまえ」とN君がぐっと押したドアは、すぐまたもう一重のドアに続いて、それをおもむろに開くと、眼前、僕は自身の瞳を疑った。何という眩しさ。何という狂想的な情景。何という奔放さ、自由さ。むせ返るような彩光の中に、肉塊の乱舞。僕はちよっとたじろいだ、立ちすくんだ。が、すぐ次ぎの瞬間、遊蕩児としての訓練はもう数年前に卒業したというような、悠揚として迫らない態度をとり返しつつ、N君と並んで、きらきらと照りはえる大きな鏡の下の椅子に、腰をおろしたのだが、正直のところ、胸の動悸はしばらくやまない。

初めは直視することもできなかった、正視することもできなかった。肉塊の旋回、明るく発散する情慾、うす暗く低迷する淫楽。

——そんな、ヘボ訳詩の一節みたような形容をならべても、徒らに概念的、センチメンタルになるばかりだ。もっとも現代の日本は、こんな情景も持っているのか知れない、ただ僕自身が時代遅れで、それに接近していないのかも知れない。然し、いかに何でも、どうもここまでは徹底してしまい。

そそりたてするような旋律につれて、あらゆ

る腕が、あらゆる腰が、あらゆる腿が、あらゆる皮膚が、皆微動し、急転し、ぐずれかかり、倒れかかる。その中心をなす真紅な唇紅。

その幾塊かが僕等の椅子の前にも横にもおし流れて来た。N君は平気だ。僕ももう平気だ。さも道德家らしい顔をして、そんなものにおもてを背けるほどの教養でもないのだが、然し僕はいま「全体」から分裂して僕等の前後左右に展開した、この「部分」の、弛緩し、疲弊し、頹廢した、弾力を失った、気魄というものの微塵もない、ただ強要された刺戟の末梢的な誘惑に対すると、いきなり反撥的に、威丈高になつて憎惡の念をぶつけた。次ぎの瞬間、僕はたまらなく憂鬱になつて、ただ一種の放心状態の中に、われながら薄きみのよくない微笑が、くちびるに浮んでくるのを感じた。

「君、一フランの貨を持っていないか？」

N君は適当なのを自身のポケットに探しかねて、僕を顧みた。僕が黙って、それを渡そうとすると、

「そこにおいてみたまえ、という。」

そのことに就ては僕も話に聞いていた。僕は静かにそれをテーブルの角においた。一人が立つ。とその一フランは、怪奇な皮膚、温かな曲線の中へ、するりとすべり込んだ。そしてまた指さきから忽ち膝下に続く靴下のはずれへ、音もなく影をかくした。

「もう一つ。」

「ここへも！」

「二フラン！」

これはデカダンの神にささげる賽銭かも知れない。一杯のカクテルすらすり切らないで、僕は、酔ったのやら、酔わないのやら、不得要領な感觸をあたまた中に持ちながら、N君と一緒に戸外へ出た。

「どうです？」

「おもしろいね。」

そう僕は反射的にいったが、実はもし「おもしろい」ということなら、僕には、あの自由奔放な「感覺」の世界そのものよりも、あすこに、一人、僕のすぐ隣りの椅子に腰をおろしていた老人が一層おもしろかった。これは今でも忘れ難い老人だ。

老人はただ一人、黙然と腰をおろしていたものである。六十を越したろう、極めて上品な、貴族的な容姿、態度。テーブルの上にはカクテル一杯。周囲には対手になっているものもなく、悠然といおうか悄然といおうか、満足そうに、寂しく、つまらなさそうに、悦に入っている、というように、僕には想像された。人生の歡樂を味い尽して、それを回顧するため、あるいは自分の肉体からはなれてゆく性の弾力をつり戻すために、おそらく毎晩、同じ時刻になると、此処へひょっこり現われて、ぼんやりと愉快な退屈を怡んでいるのではあるまいか。これは僕が主観的に、あまり善意に解し過ぎているのかも知れない。あるいは、

この老人に、僕自身を最後の「パリジャン」として空想し、表象していたのかも知れない。

翌朝。――

然しどうも、あれは肉体として実に醜惡なものだった。非芸術的な印象だった。その印象はゆうべから混沌とあたまたにコビリ付いて、僕のバリが、この印象に支配されるようになっては堪らない。もっという本統の、肉体の「気魄」にふれて、ゆうべの「毒消し」をしなくてはならない。僕は、早速ミュゼ・ロダンへゆくことに決心した。朝の食事は濃いコーヒー二碗、香ばしいパンに、新鮮な苺のみ込みのいいシヨファが有頂天にはしらせるタクシ。若葉のマロニエに微風が起る。……

ミュゼ・ロダンが晩年を送ったオテル・ビロンで、昔の修道院の建物そのままとか。

第一がっしりと古風な正門からして静寂壮重だ。はいると、いきなり野天にすえてある「考える人」の雄大さ。雄大さ、というのは、展覽会や写真版の印象があるからで、今この野天に見ると、案外、小さく、かつ親しみ易い。そのことがまた却って、その雄大さの証左となるのかも知れない。庭園には乳母らしいものに連れられた子供達が四五人、草花を眺めつつ無心に遊んでいた。ロダンは、この庭園と建物との、純フランス美をひどく愛惜したというが、随分簡素單純なもので、ロダンの作品とはすこし縁が遠いように思われる。縁の遠い方が、住宅として、あるいは製作場として、却

っていいというようなこともあったろうか。

国にいた時は、ロダンの二点、また三点に低徊願望、去り難いおもいをしたものだ、こう一堂に、惜し気もなく、ふんだんに並んでいるのを見ると、まず勿体なくなる。大小三百余点、その他にデッサンがあり、翁の蒐集品もある。大理石、銅、半像、胸像、部分、全体――ローランスがいる、ルヴロがいる。「歩む人」がいる、「鼻かけ」がいる。「瞑想」の美しき。聖ジャンがぬつと立っている。おお「接吻」。黄銅時代、地獄の門、カレエの市民。旧知に逢うような気がする。未知のものもある。「人が何かをする事さえ確かなら、少し位待っても何でもない」そうロダンは言ったが、実に根氣よく待って、そして世にもえらい事をしたものだ。ここにブチまけられたあらゆる人生の「姿体」。近寄って、じつと線から線へ、影から影へ、腫を辿らせて、初めて、表現の中核にふれるようなものも渺なくない。徐々として滲みだす魂のちから、卒然として掩いかかる愛慾のあえぎ。ロダンの仕事場には絶えず数人の男女が裸体のまま幾時間、幾日間かを「芸術」になる迄自由に、本能的に生活したという逸話を聞いたが、それでなくては、全くこれだけ複雑な、千変万化の現実はつかめないだろう。ロダンは二人が「合わさる」ことに恋愛の本質を認めた。「バオロとフランチェスカ」。「ランブレス」。「グループ」。館内には僕一人しかまだいなかった。あちらこちら、

僕は思う存分前から、後ろから、上から、下から、近づき、遠ざかり、視つめ、眺めまわした。その悉く、動いているように思われてくる。動いている。皆動く。その中に心臓のあえぎを感じながら立つ陶酔と錯覚。

——ふと、僕は、これらの作品の一つに、稚氣愛すべき悪戯が加えられていることを発見した。一つだけではなかった。二つ、また一つ。それは恐らく、ロダン芸術よりもベデカアの方が大切な一人の肉感的な参観者か、アメリカあたりからの、若いホネムーンの二人連れかが、意識的に無意識的に、案内記と一緒に持っていた鉛筆をその作品のその部分の陰影へ、衝動的にあてがったものだろう。こんな悪戯は東洋ばかりでなく、西洋にまであるとみえる。ましてロダンの芸術に対してすら。——僕はただ一人、場内の真ん中に立って、思わずふきだしたくなった。今までは詰めていた、動きのとれない芸術的昂奮が、このとき一時にはぐれて、急にゆったりと、もう一度初めから僕は場内をまわった。

ロダンへの悪戯。それは実に非芸術的な、本能的な漫遊者の記念として残ったに過ぎないが、しかし、一面からみると、これがまたロダンの「力」の一般的な効果でなくはない。……僕にしても、——ロダンは、伝記によると、「夜の巴里」を生涯知らなかったというが、「夜の巴里」すくなくもゆうべのような「夜の巴里」が、ロダンにとって何等の衝動を

も感じさせなかったろうことは、僕にもよく理解される。ロダンの「肉体」は「実感」以上だ。——僕がバリに滞在しているうち、再びあの第一夜の二重のドアを押さなかった事実、決してそれはロダンに対する芸術の冒瀆にはなるまい。

落葉を踏む

ルーヴル美術館にはいつて、「アンデエラスの鐘」を探したが、なかなかわからない。ベデカアに従って一室一室、順序よくまわっているうち、足は義足をはめたかと思うように疲れてしまう。あの巨大な建物の中にいると、出口が何処だか、それこそ迷児になりするような気持ちになる。

「あの、ミレエの……」
手っ取早く看守にきくと、皆までいわせず心得顔。

「アンデエラス！ ええ、あれはこの廊下、まっすぐに行つて、右へ曲つたところにありますよ。」

日本人は、いや外国人でも、観光客は大抵それを訊くとみえる。急にいそいそと、教えてくれた通りにゆくと、その薄暗い壁に黙然とそれはかかっていた。まず案外だったのは小さなことだ。いや決して小品というわけ

ではないのだが、何しろ、ルーベンスとかレンブラントとか、どうも大ききで来い！ というような下えらいやつが、床から天井まで腕をひろげたように野放図もなく並んでいるので、ミレエなどは、こんな片隅に、つまし

*

それにしても、一体美術品は、実物に対すると、複製で想像したものとはすっかり印象が相違する。殊に大ききの点でそうだ。「アンデエラスの鐘」なども、あまり古くからあこがれの一つになっていたもので、その「価値」はもつと、ずっと大きなものになっていた。その傑作が、こんなところに、こう小さく掛けられていたのかと思うと、失敬だな、というような義憤も起る。もともとこれが一八五九年初めてサロンに出品されたときは、ほとんど顧みられないうで、当時僅か千八百フランでベルギーの牧師に買われたのだという。それから三三人の手に転々した後、アメリカ人のものになつていたこともあるが、国家的名誉のためとあって、バリの富豪が八十万フランでフランスへ買いもどした。

*

「これは祈りの鐘だ。わたしにはその鐘の音が聞える。……」

こうミレエは、それを描きあげたときに言ったとか。実際、セピアを基調とした野色の茫々たる中に、相対して祈る男女の百姓、じ

つと見てみると、身はいつかパリのまんなか
にいることを忘却する。

一枚、ただ一枚でも、こういうものを描く
ことのできた美術家は、どんなに幸福だか。

しかもミレエは、これ以外、農人の生活、農
村の生活を自由に、おびただしい作品として
表現している。バルビゾンの隠栖に落陽を望

み、青草に憩い、春夏秋冬、たましいは自然
の中にひたり込んだ。一片のパンもかじれな
いときはあったるうが、一筆一彩、かれのい
のちをカンパスの上にぬりつける歓喜にくら
べれば、それは本統に何でも無い。

*

十三年間のパリ生活の苦難をあとに、心の
友達の待つているバルビゾンの村へ、妻子と
一緒にたどり着いたときのミレエの心境は、
すらすらと感興のあふれるばかりな、瞬間的
な一枚の素描、あれにもよく窺われるが、今か
ら八十年前は、もっと随分静かな、荒涼とし
た寒村だったに相違ない。樵夫の家と百姓の
家とが幾軒かボツリボツリ散在していただけ
で、教会堂もなく、墓地もなく、学校もなく、郵
便局もなく、日用品を売る店すらもなかった。

ミレエが初めて借りこんだ百姓家は部屋が
ただ三つ、台所と画室と、寝室と。かれの芸術
の簡素単純はまた、まったくその実生活そ
のものだった。かれの旧居はバルビゾンの村
の道沿いに、そのまま保存されていて、今は
アンドレ・ゾーアンという老人が夫婦で住ん

でいる。この老人も油画をかくが、ただから
だが頑丈で、童顔に微笑をたたえているだけ
で、その芸術は芸術とさえないわれない程度の
ものだ。が、一フランのミレエ画室見物料と、
エハガキの売上げ等、収入は相当の額に上る
らしい。

*

ミレエの仕事場は十五畳ぐらいの広さで、
最後の呼吸をひき取ったまま、埃のつもるに
まかせてある。その無造作ときたなくなつて
いるのがすこぶるいい。中央の画架。これは
小さなもので、お粗末至極。その上の壁には
柱時計がかけてある。四時五分でとまってい
るが、これは一八七五年一月二十日午後のそ
の時間に息が絶えたとすぐ、息子の一人がと
めたのだとか。

*

晩秋の日曜、朝パリを出てフォンテンプロ
ウの森へドライブを試み、そこを宮殿をまわ
って後、昼、快適なレストランにすすった葡
萄酒の酔いをそのままバルビゾンの平野を展
望しつつ過した半日は忘れ難い。薄暮の微風
が頬のほてりを冷やす。四方の自然がミレエ
の作品そのものだ。密林の落葉のふくふく
と、柔かなヴォリューム、その複雑な光の静か

さ、それを踏む靴からからだ全体にしみわた
る悠遠さ。

葡萄酒の記憶

葡萄酒といっても一律一体でないことは、
説明されるまでもない。魚と一緒にこれ、
肉のあとではあれ、それかあれかと、こはく
の色のところと甘いや、むらさきの透徹
した淡み、それだけでもパリ生活の大きな幸
福だ。旅の金なればこそ陶然たる一枚に、エ
トランゼの寂しさと楽しさを味い尽す。

然しジュネブまで、パリから二日ばかりで
ジュラの山越えをしたとき、途中アルス
(Arces)という小村におそい昼食をとろうと
立ち寄ったレストランで、のんだ葡萄酒は、
全く別な味覚を僕の舌に残している。

*

僕等が自動車を降りたとき、その小村の
静かな大通りに、レストランが二つ眼にはい
った。二つともいかにもフランスの田舎風
な、質素な石造りで、僕等は、どちらにしよう
かと迷ったが、そこへ五六人、それこそアン
リ・ルソウの点景そっくりな男連れが通りか
かって、話しかけた。話しかけたのは、僕等
が昼食をとろうとしていると察したらしい。
あちらのレストランは高くてまづいから、こ

の角にしろという。僕等も何となく直覚的に、その角へはいりかかっていた。

お礼をいって、僕等はドアを押したが、部屋は小ぢんまりと、古びてはいるが、壁には陶器の装飾があり、花瓶には剪りたてのバラがおおっていた。

料理を選ぶがものはない。献立は単純で、お客があれば、その人数だけ同じものを調理することになっているらしい。「いらっしやい！」と晴れやかな笑顔に迎えたまま、娘はすぐキッチンにはいつてしまう。

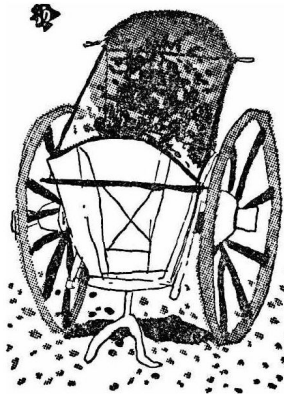
*

待つ間戸外へ出ると、旧い会堂の横に雑貨の露店がある。何の木か、大きな蔭を作っている下に天幕を張って、安物のズボンやシャツをおき並べる。一方には瀬戸の器物やらバケツやら。若い娘が甲斐々々しく立ち働いていた。どこへ行っても、若い娘がよく家事や商売を手伝っているのは快い。

さっきの男連れが、まだ会堂の向う側にいた。そこには埃だらけの乗合自動車一台。旧式なフロックにシルクハットの老人が一人、その他も能う限りの礼装をつけているところを見ると、この人達は、村の婚礼にゆくらしい。この乗合をすら貸切にするほどの豪奢ではなくて、合客を待っているなどはんびりさせる。むこうからまたお辞儀をして、あすこはなかなか上等ですよという。二派のひいきが客争いでもしているものか。

大きなオムレツとやわらかなビフテキ。これもいかさま都会では望んで得られない自然な滋味をもっていたが、一罐の葡萄酒をおし気もなく開けて、その芳烈な大地そのままの露のしずくには胸がすいた。白とも紫ともつかない、房々とした実がそのまま醗酵したような。

「これは素敵だな、全く薬品のなものは、一



南仏の葡萄酒 堂本 印象

南仏一帯にはい葡萄酒がとれる。むろん水田もあって米も出来ているが、葡萄酒の方が多し。南仏の葡萄酒は約三尺から五尺位の直立した古木である。その太い幹に葡萄の実がふさふさと垂れ下っている。村の娘たちでもとろうとおもえば充分手がとどく。

葡萄の収穫時になると、男女多数の村人が各自にもぎとった葡萄を、籠に詰め、積み込んで、馬に曳かせて行く。観光バスがその葡萄畑の間を通ると、葡萄園の男女が手を振って見送っている。こんなのんびりした風景を、南仏では到處で見る。パリ市場で見られる葡萄も、南仏産のものが多し。これらは直接田舎から持ち込まれるので、新鮮であるばかりでなく、非常に美味である。

滴も混っていない！」

*

苺にも葡萄酒をかける。それがまた実にうまい。このアルス村一帯は、フランスでもそれだけで名高い苺の産地で、紅玉累々。パリでも毎朝朝食にきつと苺をたべていた僕は、これですっかり堪能した。苺の産地には、僕の大嫌いなヘビも名物なのだときかされたが、こわくはなかった。そのときはもう葡萄酒のほろ酔になっていたから。

*

自動車はちょうど、鋭くけずった鉛筆の中心を抜けるように、若葉の並木道を疾駆する。

*

バラの香！ 小村を過ぎる。ああいい。鼻を吸う。二度吸う、と鼻へこんどは肥料のにおい！ それほど村は小さく、それほど自動車は早い。

ドールに一泊。

ホテル・ド・リヨンという名称は立派だが、そして町第一流のホテルなのだが、宿料の安いことは気の毒なくらいだ。ダブルが三十フラン、シングルが十五フラン。僕は日本の一円二十銭で、一夜の雨露をしのいだ。漫遊中最も安い一晩だった。そして宿のものの皆親切だったこと、夜の散歩のシガアの煙。

(昭和二年)

ふらんす賭博考

柳 亮

ヨーロッパの賭博国と言へば、誰でも、直ぐモンテカルロを連想するが、敢て射倅市場の股賑を極めるのは、モナコ王国の独占とばかり限らない。

株式取引所がニューヨオクのそれと、活況を競った一九二八年前後には、フランスではメルキュール神がその黄金の翼を荒々しくはばたきさせた。

当時、銀行業者は、そのベトンアルメの大金庫を傾けて、吾れも人もと相場をはった。彼等の所謂「為替売買」の大なるよりして、小なるは、浮浪者達が公園のベンチで、警察官の眼を掠めて一銭二銭の勝ち負けを争う、昔ながらの「ドミノ遊び」に至るまで、凡そ取引と言ひ、手慰みと称うるも、是れ畢竟は賭博だ。

とすれば、フランスは、メルキュール神の恩寵あまりにも豊沢な国であらう。そこには、あらゆる射倅心を満腹させる為

めに何一つ欠けたものはない。「株式」の世界は暫く問はず、わけても、「骨牌」と「競馬」とはその最も代表的なものである。

「骨牌」を弄ぶ賭博場を「セルクル」と言つて、パリ市中だけに三十余りもある。これ等は、表面、社交クラブの私設の態に設らえ、実は政府公認の下に堂々と経営を許されて居る公開賭博場で一片の身元証明を携えてさえ行けば、誰でも記名入場することが能きようになっている。

又、パリを離れて行楽場へ行けば、その娯楽場には必ず賭博場の設けがあつて、思うままに一八を争うことも能き。

地方のうちでも、北海岸のドウビル、南仏地中海岸のニースには、その大殿堂があつて、殊に全欧州の社交界の中心が、挙つてそこへ蟬集する夏のドウビル、冬のニースの、所謂シーズンには、モンテカルロの繁栄を、悉くそこへ奪ひ去るとまで言われている。

ニースにあるのは、「地中海御殿」と称して、アメリカの鉄道王フランク・ジャイ・ゴウルドが経営して居る。ヨーロッパ中の最高賭博場の一つで、世界的な流賭博者として著名な千万長者のマダム・ウエイクフィールドをはじめ、各国の王族貴族たちは、その秘かなる不断の訪客だ。

そこでは、一夜に数十万円の勝負が行われることも珍らしくはない。曾てそこで、女優のセシルソレルが一挙に

十万フランを勝った。次いで又、三人姉妹のドーリー・シスターの一人が、生れて始めて「骨牌」をめくったその日に八十万フラン程儲けたと言つて非常に評判されたことがある。

自動車王のシトロエンが、後でその話を聞いて、どうも女ばかりにそう勝目が出るのは忌々しいと、パリから態々遠征に出かけたが、忽ちの間に十数万フランの損をして、ほうほうの態で退却したという話もある。

シトロエンの賭博通いは有名なもので、いろいろ振つた逸話をのこして居る。

シトロエンの商売仇はブジョオである。イタリー財閥の巨頭ガリノ家の資本による会社で、アメリカ資本系のシトロエンとは、屢々劇烈な競争を演る。

ガリノの片腕で、後年、所謂ウーストリック演職事件を捲き起して当時の内閣を動揺させ、現にそのためサンテの獄中に呻吟して居るウーストリックが、その全盛時代に、自ら采配を振つて株式取引所にシトロエンを攻撃して居た頃のことだ。この二人の仇敵同志が、偶然ドウビルで邂逅した。双方で、相手をそれと確かに識らない中に、カードを争つたところなかなか勝敗が決しない。そのうちに、双方で相手の人柄を覚つて、愈々負けてはいず、未曾有の大賭博を戦わせ世間を驚倒させたことがある。その時の勝負は一夜に数百万フランが受授されたと言ひ話だ。

その後、やはりドウビルの賭博場で、シトロエンが劇しい負け方をした。有り金をすっかり無くした上莫大な借金を拵えて、軍用金の補充にバリへ帰って来ると、シトロエンの敗報が既にバリへ伝わって居て、株がドンドン下って居る。会社では重役会が召集せられ、各関係銀行へはシトロエンに対する貸出を禁ずる旨が通達されて居る。頗る窮して、自宅へ戻ったところを、近親が待ち構えていて、否応なしに警視庁へ引っ張って行った。そうして、「爾今再び賭博場へ足を踏み入れざる旨」を届け出させてしまった。

フランスには、賭博廃止届と言う類例のない制度があつて、これに署名をすれば、いかなる賭博クラブにも入場が許されない。どうしても賭博通いの習癖が、自分ではなおらぬ者など、自らこの届けを出しに行くという話もよくある。シトロエンも、お蔭でその後、フランスの賭博場へは、その勇姿を見せることが出来なくなった。

ヨーロッパの賭博場と言っても、公開賭博場の許されている国はフランス以外では、ベルギー、オースタリー位のものであるが、そこで普通に行われて居る賭博の種類は、「骨牌」と「玉廻し」である。「ルーレット」と言うのは、一から三十六までの目盛をした円盤へ玉を入れて廻転させ円盤の廻転が止まると玉が数字の目盛の上へ転落して当り番号を示す。円卓の上には一から三十六までの数字が

三行にわたってしるしてある。丁度当り番号へ賭けて居れば、忽ち三十六倍になって返る。別に、目盛の数字は赤と黒に塗り分けられていて、赤黒だけを追うこともできれば、数の稀偶を追うことも能きる。又、三十六を二半して、前半後半半数を追う方法もあり、その他縦横から数字列を追う様にもなつて居て、遊び方は実に千種万様極まりがない。

ルーレットにやや似た「ブルー」と言うのも相当に行われて居るが、これは数字の目盛が九しかなくずっと簡單だ。

このルーレットの円盤を廻す役には、仲々八カ間しい骨があつて、モンテカルロには、とくに「廻役」を養成する学校まである。熱練次第ではその「廻役」の思い通りに番号を振り出すことが能きるようだ。

ルーレットは、モンテカルロの名物として天下に知れ渡っているが、他所ではあまり広く行われて居ない。フランスには北海岸のツーカーにあり、ベルギーのブラッセルにも一時あつたが一昨年の末に禁止された。従つて、主として行われるのは「骨牌」の方で、バリの賭博クラブでは専らこれに限られて居る。

バカラには、「胴張式」と「鉄道」の二様のやり方がある。

親と子に分れ、カード箱から各々二枚乃至三枚のカードを引き、九点を満点として、総計得点の多寡で勝敗を定める。

鉄道式では、卓を囲んで車座に列び、席順で二人ずつが親子に分れ、同じ方法で勝負をする。勝がかりで順繰りカード箱を次席へ廻して行くところから鉄道の名が起つたものだろう。賭金は一勝負毎に倍加する。そこで勝つた者は適當の潮時を見計つて親の手を流す、流された時の場銭の額がプレミアムとなつて、それだけの賭金を積まなければ親を譲り受けることができない。勝負が四五回も続くと忽ち場銭が太つて危険率が多い。そのまま続けるものがないとその手番は競売に出される。この時をねらつて適當に競り落し、いい目を買つて出るのがこの遊びの山だということだ。これを「パンコ」という。

「胴張式」の方は説明するまでもなく、胴を樹てて胴と子とが勝負するので、この場合、親をとるのは普通賭博場の経営者である。鉄道では一勝負毎に所謂寺銭を取られる、そうして寺銭の半分は政府、残り半分は賭博場の収益となる。胴張の方は、寺銭はとらない。賭場ではこれはお客様のお慰みと称しているが、その実、この勝負は賭博場の金融を司る鍵である。

ある時、シャンゼリゼの「リドー」で、毎晩親が五六万円ずつ負け続けたことがあつた。大株主の一人にショウと言う銀行家が居る。連日の敗報で持株が大暴落をし、ショウ銀行は取りつけに合うという騒ぎを起したことをさへある。